



Title	北海道医療大学
Author(s)	光本, 滋
Citation	高等継続教育研究, 1, 35-41
Issue Date	2002-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51855
Type	bulletin (other)
File Information	Mitsumoto2-1.pdf



[Instructions for use](#)

(4) サテライトキャンパス事業から

■ 北海道医療大学

光本 滋

1. サテライトキャンパス開設まで

医療大(北海道医療大学)サテライトキャンパスは、2001年9月に開設した。小樽商科大学・札幌国際大学・札幌学院大学・公立ほこだて未来大学に次ぎ、道内では5番目である。

開設の背景には、私立大学の経営環境が厳しさを増しつつあることに対する関係者の切羽詰った危機意識がある。札幌圏にありながら、市内に校地をもつ諸大学と比べると、医療大の立地は必ずしも有利な位置にはない。本部キャンパスのある当別は、札幌からおよそ1時間の距離にある。こうしたことから、同大学の行動計画委員会がまとめた報告書(「2008 行動計画委員会検討結果報告書」)は、札幌中心部にサテライトキャンパスを開設することにより、“遠い”キャンパスイメージを払拭するとともに、看護学部の実習のカンファレンスや時間的余裕のない社会人院生の教育の拠点をつくる方向を打ち出

した。そして、これら教育・研究の補完の機能、広報機能に加え、社会との連携、生涯学習事業の展開の面からも、サテライトキャンパスはメリットが大きいと評価されるに至った。(「2008 行動計画委員会検討結果報告書」56頁)

サテライトキャンパスの計画段階では、先行する小樽商大や札幌学院大の事例も参考にされたという。したがって、医療大サテライトは、これらの大学と発想や機能の一部を共通しているが、同時に、一味違う“医療大らしさ”も備えている。一口に言うなら、それは、道内の医療関係職の養成において相当の位置を占める同大学の特色が、サテライトの経営にも反映しているということである。そのことは、以下に詳しく見るように、この施設で実施されることが多くなった同大学の生涯学習事業に最もよく表れている。

2. 医療大サテライトキャンパスの機能・利用の特徴

2-1 施設の概要と利用状況

まず、サテライトキャンパスについての概要を記しておきたい。医療大サテライトは、札幌市都心部の交通至便な地区の一角(中央区北4条西6丁目)にある。場所の選定にあたっては、地理的条件や賃料のほか、同じビルにあるテナントが、大学のキャンパスにふさわしいものであることが要件になったという。

施設は、受付のあるロビーのほか、会議室1(30㎡、定員18名)、講義室2(A(77㎡)・B(82㎡)、各定員45名)、研究調査室1(15㎡)である。このうち、講義室は2室の間仕切りをとり、それぞれ1つの部屋として使用することができ、その場合、

定員は最大で144名まで拡大することができる。医療大の教職員・卒業生は、申し込みにより会議室・講義室を無料で利用することができ、パソコンのある研究調査室には予約なしでも自由に入出入り可能である。開館時間は、月～土曜日の13:00～21:00とされている。

私たちがサテライトキャンパスを実際に訪問したのは、開設からおおよそ2カ月後のことであった。利用動向を判断するには時期尚早と思われるが、この時点で見えてきた状況について、職員の方から次のような話をうかがうことができた。

①稼働率は計画段階で予想していた 40 %がほぼ達成されている。

②打ち合わせや院生の研究指導など、小規模の利用が予想以上に多い。ボランティア団体など、教員が関わる学外団体の利用も広がりつつある。

③学部や専門領域によるサテライトに対する認識の“温度差”はあるが、実際に利用した教員によるとおおむね好評であり、サテライトの利便性についての認識は口コミで拡大している。

行動計画委員会が見通した、教育・研究の補完

や社会との連携において、医療大のサテライトキャンパスは順調に滑り出した、と言ってよいだろう。

2-2 生涯学習事業におけるサテライトキャンパスの利用

冒頭見たように、医療大サテライトの機能の一つに、同大学の生涯学習事業の発展に資することが挙げられていた。この点において、サテライトキャンパスはどのように利用されているのだろうか。

2001 年度の前半と後半、すなわち、サテライトキャンパスの開設をはさんだ前後の時期の生涯学習事業の実施状況は以下ようになる。

区 分	講座数・回数(会場)	
	2001年4月～8月	2001年9月～2002年3月
リフレッシュスクール	5講座28回(札幌)	4講座13回(サテライトキャンパス・札幌・医療大)
公開講座・セミナー	3講座4回(札幌)	8講座23回(札幌・全国・札医専)
国際医療フォーラム	—	1講座1回(札幌)
学園都市線セミナー	3講座14回(医療大・札医専※)	7講座(特別講演1を含む)27回(サテライトキャンパス・医療大)
エルダースクール	2講座9回(札幌)	4講座21回(サテライトキャンパス)
地域連携セミナー	3講座11回(札幌・江別・当別・医療大)	1講座3回(当別)
大学開放講座	4講座7回(医療大)	2講座13回(医療大)
計	20講座70回	27講座101回(うちサテライトキャンパス56回)

※札幌医療福祉専門学校(札幌市北区あいの里)

(北海道医療大学『「生涯学習事業」のご案内』(2001.4～2001.8、2001.9～2001.3)より作成)

サテライトキャンパスが開設されたことにより、2000年8月以前は札幌市内で行われていた講座のかなりの部分が、自前の施設により開催できるようになったことが分かる。現時点では、このことが受講者の数や受講動機の引き上げなどにどのような影響を与えているのか、また、大学側の期待した“札幌か

ら遠い大学”イメージの払拭などにどれだけ寄与しているのかを具体的に示す資料はない。とはいえ、これらにとってサテライトの存在がマイナスに作用するとは考えにくいし、何より、会場の確保や資材の運搬などのために職員が奔走しなくてすむ。職員が企画や連絡・調整等の業務に落ち着いてとりくむこと

のできる条件をつくったことだけでも、サテライト開設のメリットは小さくないと思われる。

2-3 費用対効果

いかにメリットをもたらす事業であっても、その費用対効果は無視できない。とりわけ、私立大学においては今日、それが厳しく問われる実情がある。

医療大の「2008 行動計画」においては、サテライトキャンパスの設置と維持にかかる費用を毎年 1000 万円程度と見積り、その費用対効果を他の広報媒体との比較から評価した。その結果、札幌市営地下鉄中吊り広告(全車両 1 枚、1 年間。約 1800 万円)、地下鉄駅のホーム電飾枠利用(全駅、各 1 カ所ずつ、3 カ月。約 2700 万円)、新聞広告(北海道

新聞(札幌本社版)の全面の 1/3、20 回、約 1000 万円)、テレビスポット(制作費・広告費、約 1000 万円)などと比べ、「固定的で利用価値のある本学拠点を札幌市内に開設する広告効果の方が期待でき」、さらに、「サテライトキャンパスにおいて様々な事業を展開することにより、新聞、テレビ等の取材等による無料で、効率のよい広報効果も期待される」と結論した。

これらは広報機能に限った費用対効果の予測にすぎない。当然ながら、サテライトキャンパスをもつことは、教育・研究や社会貢献活動の充実につながる。これら「定量化できない利益」をも勘案し、行動計画委員会は、札幌市内中心部にサテライトをもつことのメリットは大きいと判断した。

3. 医療大の特性・地域性と社会貢献活動

施設の利用状況からは、医療大サテライトが順調に滑り出した様子をうかがうことができた。ここで、サテライトキャンパスにおいて展開されている事業の中で、最も「医療大らしさ」を見ることができ、生涯学習事業の中身に立ち入っていくことにしたい。

3-1 医療大の特性と生涯学習事業

医療大サテライトは、計画段階から、同大学の生涯学習事業の企画・運営部署となる「北海道医療大学 NICE センター」の設置と一体のものとして構想されていた(北海道医療大学「2001 MESSAGE 自己点検・評価概要」14 頁)。医療大サテライトが同大学の生涯学習事業の拠点として構想されたことは、このことにも表れている。センター名称にある「NICE」とは同大学が 1989 年から実施している事業の名称で、*National and International Collaborative Extension* の頭文字をとったものである(センターの規程は 2001 年 4 月に制定)。

現在、実施されている生涯学習事業は「卒業生・職能人向け」のものと「一般向け」のものがある。前者としては、リフレッシュスクール、公開講座・セミナ

ーが、後者としては、国際健康フォーラム、学園都市セミナー、エルダースクール、地域連携セミナー、大学開放講座が開催されている。同大学の生涯学習事業の特徴は、近年、一般向けのを抑え気味にする代わりに、卒業生・職能人向けのプログラムを充実させてきているところにある。図に示したのは、2001 年度後期(2001 年 9 月～2002 年 3 月)の生涯学習事業の一覧である。



【北海道医療大学生涯学習事業(2001年9月～2002年3月)】

区分	講座名	テーマ	参加資格	人数	受講料/回数	会場
リフレッシュスクール	薬剤師リフレッシュスクール	腎疾患と薬物療法	薬剤師	30名	10000円/4回	サテライトキャンパス
	歯科医師リフレッシュスクール	誰でも上達できる支台歯形成～拡大鏡と高速FGコントラ使用の薦め～	歯科医師	30名	42000円/4回	モリタ4階研修室
	臨床心理リフレッシュスクール	臨床心理学の最近の話題	臨床心理職および関連職	35名	10000円/4回	サテライトキャンパス
	人事・労務部門担当者向けリフレッシュスクールⅡ	職場のメンタルヘルス	人事・労務担当者、衛生管理者および関連職	30名	12000円/4回	サテライトキャンパス
公開講座・セミナー	医学薬学公開講座	薬剤師に求められるコミュニケーション			無料/1回	KKR札幌
	医学薬学セミナー		(薬学部同窓会主催)		無料	全国
	歯科医療公開講座	21世紀の歯科医療を考えるⅢ			無料/1回	北海道経済センター
	歯科臨床セミナー		(歯学部同窓会主催)		無料	全国
	歯科衛生士公開講座				無料/1回	朝日ホール
	札幌医専・看護公開講座				無料/1回	札幌医療福祉専門学校
	札幌医専・介護福祉公開講座				無料/1回	札幌医療福祉専門学校
	札幌医専・言語療法公開講座				無料/1回	札幌医療福祉専門学校
国際医療フォーラム	健康とは何か	一般		無料/1回	札幌サンブラザホテル	
学園都市線セミナー	特別講演	IT時代の保健福祉教育	一般		無料	サテライトキャンパス
	自分探しのカウンセリング		一般	80名	700円(1回)・4000円(シリーズ)/8回	サテライトキャンパス
	予防～元気に活躍するために～		一般	80名	700円(1回)・1500円(シリーズ)/3回	サテライトキャンパス
	究極の薬膳料理 鍋!		一般	80名	700円(1回)・1500円(シリーズ)/3回	サテライトキャンパス
	明日から使える人間関係スキルⅠ		一般	80名	700円(1回)・2000円(シリーズ)/4回	サテライトキャンパス
	明日から使える人間関係スキルⅡ		一般	80名	700円(1回)・2000円(シリーズ)/4回	サテライトキャンパス
	少子化社会と現代の子育て事情		一般	50名	700円(1回)・2000円(シリーズ)/4回	サテライトキャンパス
エダースクール	高齢者向健康体操Ⅱ・Ⅲ		一般	20名	8000円/8回	サテライトキャンパス
	豊かな生活をめざしてⅡ		一般	80名	700円(1回)・2000円(シリーズ)/4回	サテライトキャンパス
地域連携セミナー	当別町・ゆとりっちセミナー		一般		無料/3回	西当別コミュニティーセンター・北海道医療大学
大学開放講座	看護学部公開講義『総合科目Ⅰ・Ⅱ』		一般	各100名	無料/13回	北海道医療大学

(北海道医療大学『生涯学習事業』のご案内(2001.9～2001.3)より作成。空欄は指定なし。)

ここで、卒業生・職能人向け講座の中心であるリフレッシュスクールに注目したい。これは、薬剤師、歯科医師、臨床心理職および関連職、人事・労務担当者、衛生管理者および関連職と、参加資格を限定し、臨床・実践に役立つ情報をシリーズで提供するものである。同講座は、2000年度に薬剤師およびPSW(精神保健福祉士)を対象にしたものが開講され、これが好評だったため、対象分野・講座数を拡大して継続されている。2000年度、この種の講座は34講座開講され、のべ1645名が参加した。前年度に比べ547人の増加である。毎年の講座数は違うため、参加者数を一概に比較することはできないが、職能人向けの講座の需要が高いことは、受講人数に表れていると見てよいだろう。

一方、一般向けの講座においても、保健医療、福祉、臨床心理分野など、臨床・実践的なテーマが目立つ。「一般向け」という言葉からイメージされる、英会話やパソコン教室のような講座にはとどんでいないことが、医療大の生涯学習事業の特徴である。この講座編成は、他大学との差別化を図るために意識的に行われているものだという。

これら生涯学習事業に見られる特色は、「医療系総合大学」としての同大学の性格と深くかかわっている。

ここで、沿革を確認しておきたい。医療大は、北海道石狩郡当別町に、1974年4月、東日本学園大学(薬学部)として開学した。1978年4月に歯学部開設、12月には歯学部附属病院を開院している。1993年4月には看護福祉学部看護学科、医療福祉学科を開設した。この間、大学院の各専攻、附属専門学校、歯科クリニックなどを順次つくり、開学当時の薬学単科大学から、現在の「医療系総合大学」の姿に徐々に体裁を整えてきた。

1994年4月、大学名称を「東日本学園大学」から「北海道医療大学」へと変更、その後も、薬学部総合薬学科、大学院の薬学研究科医療薬学専攻修士課程、看護福祉学研究科看護学専攻、臨床福祉・心理学専攻修士課程、看護福祉学研究科看護学専攻臨床福祉・心理学専攻博士課程(後期)を次々に設置開設する。そして、2000年4月、NICEセン

ター設置。2001年9月、サテライトキャンパス設置。2002年度には、医療福祉学部臨床心理専攻が改組・独立し、心理科学部が発足する。

学内の議論の仔細は明らかでないが、この間、医療大は、自校が排出する職能人の質の維持・向上と、そのことを通じてなされる卒業生と大学に対する社会的評価の向上に関心を強めてきたようだ。その結果、養成段階だけでなく、卒業後の知識や職能水準の維持に関しても、大学が継続的にサポートする体制づくりの一環として、同大学の生涯学習事業は位置づけられている。

専門職社会の側にもこうした教育の要求があることは、参加者の動向となって表れている。全体の参加者数に占める職能人向け講座の参加者数の割合は、1999年度28%(3977人中1098人)だったものが、2000年度は41%(4010人中1645人)に増加している。2001年度以降もこの傾向が続き、職能人向け講座が量的にも中軸の位置を占めることになるかどうかは分からない。だが、大学の特性と関わって、医療大の生涯学習事業が一つの方向に進みつつあることは間違いない。サテライトキャンパスの開設は、この動きを後押しするものと言ってよいだろう。

3-2 医療大の地域性と社会貢献活動

職能人向けのものであれ、一般向けのものであれ、特定地域を対象としたものでない限り、公開講座等において“集客”を図るためには都心部の立地が有利であることは疑いない。札幌市中心部にサテライトが設置された理由の1つも、まさしくそうであった。

とはいえ、医療大の目は決して札幌だけに向けられているわけではない。学生の出身地、卒業生の就職先のいずれにおいても、同大学にとっては、北海道全体がいわば“主要なマーケット”である。逆に、北海道の医療関係専門職養成全体から見ても、同大学は重要な位置を占めている。これらのことを数字の上から確認していきたい。

2001年度、医療大の志願者・入学者に占める道内出身者は、志願2247人(45.3%)、入学281人(58.5%)である。道内出身者の割合は、志願者か

ら合格者、そして入学者になるにつれて高くなり、しかもこれらは年々高くなる傾向にある。

同大学の2001年3月卒業生の就職先は次のようになっている。

学部(学科専攻)		地 域		
		札幌市	道内(札幌市以外)	その他
薬学部		26%	41%	33%
歯学部		30.4%	24.0%	45.6%
看護福祉学部	看護学科	34.1%	12.1%	53.8%
	医療福祉学科臨床心理専攻	28.9%	33.3%	37.8%
	医療福祉学科医療福祉専攻	35.6%	35.6%	28.8%

(北海道医療大学『2001 MESSAGE 自己点検・評価概要』90～91頁より作成)

一都市としては、札幌市内に就職する者が断然多数であるが、道内各地に進出する者の比率もそれに匹敵する。とりわけ、薬剤師の道内諸地域への進出ぶりは目立つ。

一方、薬剤師・歯科医師・看護師の養成を行っている道内の大学の入学定員(2001年度)について見ると、薬学部では、360名中120名(ほか、北大80名、北海道薬科大160名)、歯学部では、135名中100名(ほか、北大35名)、看護系学部では、370名中80名(ほか、札幌医大50名、天使大80名、旭川医大60名、日赤北海道看大100名)となっており、いずれの分野においても、医療大の地位は無視できない。とりわけ、歯学部の入学定員においては、道内最大数である。このように、人材の供給関係を通して見た場合、医療大にとっての北海道、北海道にとっての医療大は、互いになくはない間柄となっている。

2002年度入試から薬学部が開始した、推薦入試地域医療特別選抜は、こうした状況を自覚的に引き受けることにより、大学の「個性化」を図ろうとするものと言えよう。この制度は、薬学部入学定員150名のうち、10名を対象としたもので、大学が指定する地域の高等学校を平成14年3月卒業見込みの者で、医療大薬学部での勉学を志し、卒業後、地域医療に貢献する強い意志をもつことを選考の条件と

している(学業成績の基準は、化学I B(または理数化学)を修得し、それらの評定が4.0以上でかつ全体の評定平均が3.8以上。また、出身高等学校長の推薦が必要)。大学が指定する地域は、檜山・空知・留萌・宗谷・網走・胆振・日高・十勝・釧路・根室10支庁の管内である(北海道医療大学『2002入学試験要項』)。

道庁の統計によれば、1999年度の北海道の届出薬剤師総数は8507人。薬剤師総数の人口10万対は149.2人で、全国の162.8人を下回っている。また道内の薬剤師1人当たりの人口は670人だという(北海道「平成11年北海道保健統計年報」)。広大な北海道にあっては、平均値が低いこと以上に、道内諸地域における地域間格差の存在は深刻な問題であろう。医療大が特別選抜の対象として指定した地域は、いずれも人口10万人あたりの薬剤指数が全国平均以下の支庁であり、これらを合わせると、北海道の面積の大半を占める。特別選抜によって入学した学生の学修と卒後の地域社会への貢献については、今後の展開を待たねばならないが、医療大が、自身の教育を通じた社会貢献の主要なターゲットとして北海道という“地域”をより明確に見据えはじめたことは、この制度の発足からうかがえると言ってよいだろう。

4. 考察

医療大は、近年、北海道地域の保健医療活動等への貢献や、“マイクロレベル”では当別町内の住民や福祉協議会とのつながりも視野に入れたの地域活動を展開することにより、その“地域性”を高めつつある。だが同時に、保健医療分野の資格は“全国区”であり、その技術や実践、人的・物的諸条件等の水準は、全国(あるいは国際)的な動向を意識することになる。

したがって、同大学の経営行動は、つねに全国を視野に入れた、いわば“両睨み”的なものとならざるをえない。前節で詳しく見ることはしなかったが、薬学部・歯学部それぞれの同窓会の主催による「薬学セミナー」「歯科臨床セミナー」の会場は、北海道から、東北・関東・北陸・九州・沖縄と、文字通り全国に広がっており、参加者も開催地域で活動する卒業生となっている。これは、同大学が、「全国」を意識していることの一つの表れだと言ってよいだろう。

ところで、医療大がこのように全国を意識することは、必ずしもその“地域性”と矛盾するものではないように思われる。すなわち、いかなる全国的・国際的な学術研究の成果、臨床・実践の知識や技術の革新であっても、それらは、最終的には保健医療の現場に普及・応用されることによってしかその価値を実現し得ない。各地に展開する専門職業人のネットワークを通じてこの価値の実現を果たしているところに、医療大の地域貢献活動の意義があると見ることができるからである。

医療大サテライトキャンパスは、公開講座など同大学がつみあげてきた社会貢献活動の延長線上に生まれたものであり、しかも、それは保健医療分野の専門職業人の再教育、あるいは地域社会に対する保険医療知識の普及を中心にすえたものだった。それらは、同大学にとって、教育・研究とは区別される“余事”としての活動ではなく、医療系総合大学の本来の教育・研究活動の“正統的な展開”、あるいは“広義の社会貢献活動”とも言うべきものである。医療大はいま、こうした活動を展開し、地域社会との共同関係の新たな段階を模索する段階にあるように

思われる。

同時に、これら生涯学習事業や看護実習の事前・事後指導など、大学の正規の事業——それゆえ、大学の行動計画委員会も事前にある程度見通しをもつことができる——以外にも、教員のかかわる地域のボランティア団体などにもサテライトの利用は広がりつつあるという。こうした“副産物”を含め、サテライトキャンパスが存在することにより大学と地域社会との新しい結びつきが形成され、大学の教育・研究活動や地域機能にメリットをもたらしているのだとすれば、そのことは、サテライトキャンパスの新たな評価指針をもたらすものである。また、そうであるなら、サテライトの設置は、個別大学の「生き残り」方策という次元を超え、大学の社会貢献活動の再定義を与える契機ともなりうるものとして注目されてよい。

道内にあるサテライトキャンパスの歴史はどれもまだ浅いため、こうした評価が可能であるかどうか見極めるためには、経年的・継続的な調査が必要である。個々の事例を抽象化・一般化するだけでなく、大学の性格の違いを考慮することも考えなければならない。また、大学の管理運営組織レベルの意思としては浮かびあがない個々のスタッフの意識や諸活動の変化をとらえる調査研究もなされねばならない。これらは本研究グループの今後の課題だろう。